

【目的】1989年の文部省の学習指導要領の改訂で、中学校と高等学校では男女共学となり、領域の再編成がなされ、教育内容も変化した。それを受けて家庭科教育の現場である学校はどのように対応し、授業実践にどのような傾向が見られるようになったか、その変化と特徴を把握することを目的とする。

【方法】家庭科教育関連雑誌「家庭科教育」「月間家庭科研究」「新しい家庭科We」の3誌をとりあげ、1990年4月号から1995年9月号までに掲載された家族及び保育に関する領域の授業実践の動向と変化を分析した。

また、高齢者に関する授業実践の報告10例を学習形態、内容、授業方法、生徒の意識や反応、教師の考えに分けて分析した。

- 【結果】(1) 学校段階別では、中学校と高等学校からの実践報告が多く見られた。  
(2) 領域別では、家族領域での報告例は、毎年10件ほどと安定しており、学校段階による違いも小さかったが、保育領域での報告例は小学校できわめて少なかった。  
(3) 履修形態別では、小、中、高等学校いずれも男女共学が圧倒的に多かった。  
(4) 実践内容別では、高等学校の家族領域で、女性問題と社会保障が、保育領域で乳幼児の成長発達と性教育が多く取り上げられていた。また、高齢者問題についての授業報告がかなり取り上げられるようになったことが注目される。  
(5) 現場の教員が学習指導要領の変化を歓迎し、自主教材を併用し、学習内容を発展拡充するなど意欲的に取り組んでいる姿勢が明らかになった。